

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

BULILAN Carl Milos Ruchina

(ブリラン カール ミロス ルチナ)

論文題目

Connectivity and Interdependence: Social Network  
Analysis of Community Tourism in Pamilacan Island, the  
Philippines

(連結性と相互依存—フィリピン・パミラカン島におけるコ  
ミュニティ・ツーリズムの社会ネットワーク分析)

論文審査担当者

主 査

名古屋大学 教授 伊東早苗

委員 名古屋大学 教授 東村岳史

委員 名古屋大学 准教授 日下渉

# 論文審査の結果の要旨

## 1. 論文の概要と構成

本研究はフィリピン・パミラカン島を事例に、コミュニティ・ツーリズムという住民の共同行動について社会ネットワーク分析法を用いて論じたものである。論文の目的は、フィリピン内外の政府機関とNGOが開発プロジェクトの一環として1990年代後半から導入したパミラカン島のコミュニティ・ツーリズムが失敗した原因を分析し、残された住民がその後どのようにそれを再生したかを、住民が築いたネットワーク構造に注目して分析することである。

著者は2012年から2014年までの期間に9か月にわたる人類学的なフィールド調査を実施し、参与観察と詳細な聞き取りを通じて収集したデータを、社会ネットワーク分析の手法を用いて分析した。論文の中心的議論は、コミュニティ・ツーリズムは行政、援助機関、NGO等の外部支援が制度的な外形を整えるだけでは持続的に機能しないものの、住民同士のインフォーマルな相互扶助ネットワークがその外形を活性化させ、主体的に外部支援団体や民間観光業者と連携する体制を築くことができれば、当初の活動を維持・発展させることが可能であるというものである。

論文は、そのために三つのネットワーク (the Enabling Network, the Business and Marketing Network, the Mutual Support Network) を構築する必要があると主張する。第一のネットワークは、政府機関、NGO、住民間のネットワークである。このネットワークを通じて、住民はコミュニティにおける観光資源の不足を補うための物質的、技術的なサポートを外部機関から取り付けることが可能となる。第二に、民間観光業者、観光客、地域住民間のネットワークである。このネットワークを通じて、住民は観光客を呼び寄せるための営業にかかる取引費用を安く抑えることができる。第三に、住民間に存在する相互扶助のネットワークである。コミュニティ・ツーリズムの開始以前、住民は漁業を生計の柱としており、その頃からの相互扶助関係が維持されてきた。このネットワークは住民主体のコミュニティ・ツーリズム再生の過程で、必須の役割を果たした。本論文は、これら三つのネットワークを構築することを通じ、パミラカン島の住民が、外部支援団体が導入する公式の組織や秩序が崩壊した後も、土着の秩序に根差す新たな形のコミュニティ・ツーリズムを維持できる可能性を示した。

本論文は全七章からなる。第一章は研究課題およびその背景や意義を説明し、研究手法を説明する。第二章は、既存のコミュニティ・ツーリズム研究の限界を議論した上で、ネットワーク分析のアプローチを導入する。さらに、その限界とそれを補完するコミュニティ共同行動に関する三つの理論的アプローチについて説明し、本研究の理論的枠組みを提示する。第三章は、事例となるフィリピン・パミラカン島を説明する章である。島における資源と島民間に存在する相互扶助システムを説明し、コミュニティ・ツーリズムが導入されるに至った背景と経緯を分析する。第四章および第五章は、参与観察とインタビューにより得られた

## 論文審査の結果の要旨

ネットワークデータを提示し、ソシオメトリック構造を分析する章である。具体的には、第四章はフィリピン政府機関と NGO によりパミラカン島に形成された二つの住民組織の運営実態を分析し、第五章はこれら二組織が分裂した経緯と、その後に形成されたインフォーマルな住民ネットワークを分析する。第六章は第二章で論じたコミュニティの共同行動を分析するための理論的アプローチに立ち返り、コミュニティ・ツーリズムという共同行動の分析に、本論文で用いた社会ネットワーク分析がどのように有効であったのかを議論する。第七章は論文全体を概観し、主要な議論を要約する章である。

本研究の第四章と第五章の成果は二本の学術論文にまとめられている（うち一本は出版、もう一本は近刊）。

### 2. 評価

フィリピン・パミラカン島のコミュニティ・ツーリズムに関する社会ネットワーク分析を中心とする本論文は、以下の点が評価される。

1) 政府や援助機関主導の開発プロジェクトに対する住民の視点にたった批判は 1980 年代に遡る議論であり、以後参加型開発の推進と実践につながってきた。本論文は、参加型が前提となるコミュニティ開発プロジェクトとしてのコミュニティ・ツーリズムが失敗に終わった過程を分析し、失敗に終わった後に地域住民が自発的な社会秩序をどのように再構築し、生計維持につなげているかに踏み込んだ分析をした点で、学術的な意義をもつ。住民がコミュニティ外にネットワークをのぼしながら、地域住民の内発的な論理で新たな形のコミュニティ・ツーリズムを構築する様を、パミラカン島の人々の現実世界に密着して生き生きと描き出した。

2) 観光産業における社会ネットワーク分析の適用自体は新しいことではないが、従来の研究ではコミュニティよりも広い範囲におけるステークホルダー間のネットワーク分析が中心であった。コミュニティ内部のアクター間のネットワーク分析を、コミュニティ外に広がるネットワークとの関係性の中で分析した研究は少なく、評価に値する。これを可能にしたのは、本研究が、アクター間のやりとりのパターンを捉えるための社会ネットワーク分析を、エスノグラフィー調査で得る質的データの分析と組み合わせ、接合性のパターンと関係性を同時に分析したためで、特筆に値する。

同時に、本論文は以下のような不十分な点も含んでいる。

1) 地域住民が内発的に新たなコミュニティ・ツーリズムの形を作る様を肯定的に論じてい

## 論文審査の結果の要旨

る一方で、その肯定性を裏付けるための基準についての説明が弱い。新たな形のコミュニティ・ツーリズムがどのような点で住民にとってのより良い世界の構築につながるのかを、数量的なデータの提示も合わせて補完すべき余地がある。また、参加型コミュニティ開発の限界を示すのであれば、それに代わる支援の仕方があるのかどうかも論じることは可能であった。

2) 地域住民の間に存在する伝統的な相互扶助システムの性質に関する考察が、部分的に一貫性を欠く。コミュニティ・ツーリズム存続の要件である新たなネットワークの構築には、以前からある相互扶助の人間関係が不可欠と論じる一方で、伝統的な相互扶助システムを特徴づけるクライエントリズムに関する考察が弱い。コミュニティ外のアクターと連結する機会が増えることによって、住民による伝統的なパトロンへの依存が減少し、クライエントリズムは崩壊の途上にあると論じるが、新たなネットワークの内部における住民間の権力関係が本当に消滅するのかどうか、疑問が残る。

しかし、これらの点は、論文著者が今後のコミュニティ・ツーリズム研究を深化させる上で取り組むべき将来の課題であり、本論文の価値や独自性を損ねるものではない。本論文は、博士論文としての水準に足りるオリジナリティと学術的価値を十分に有していると判断する。

### 3. 判定

以上のような審査の結果を基に、本論文は博士（国際開発学）の学位に値するものと判定する。